

新訓集

比之部

廿五

津田文庫

文庫 1

1604

22





倭訓栞前編二十五

洞津 谷川士清 纂

比の部

ひ 日とらひ明くまはまきと自然まがらひ初め一語なり日出の  
 大さ富士山の如く寅時より深紅なる土佐南海北眺望志別鳥羽の漂船の  
 規一所も同一大まくえゆる地水の陰氣と含める故なり出る時ハ遠一  
 地より十七萬里日中の近一地より十五萬六千五百里なりとらひ○清和  
 實録二日初出白无光月初出赤如丹とらひ慶長十九年春  
 朝日如銅と神君の年譜とええ寛文二年三月数日の間月色の如く光  
 ふらひ一正徳四年三月十七日より十九日まじ朝暮日色血の如く光  
 ふらひ月も亦銅鏡の如く赤く光ふらひ○靈と神代紀よりあり天地の  
 間日ほく靈ふらひとらひ○天と日ともらひ天皇とらひ  
 とらひ後世天の下とらひ言成日の下とらひ類也又天とらひ日と

010190596872



いふ語は大に別てりもあらず○火も日より出たる詞なり火の精靈ハ  
日なりよと神代紀より日と心の象と云天地の心ハ日なり人乃心靈ハ日  
餘光なり古語に靈ハ火也と云えたり日本紀に燐もよあり○肥前  
肥後も本火の國あり日本紀に云えり○琉球に成すつとあり○  
貧家の壁に火ありとあり詩に云ふ飢火也○又火井あり越後に出  
○檜とひもひのさしとあり火と出と木なりといつる本草に据ハ檜  
ハいふと成べしといふり矣辛雜識に云ふ新羅松一名羅木なるもの  
といふと羅木ハ日向松あり又唐のさしとあり山ひのさしとあり葉こと  
○米とよむハ冷たきあり一カ葉集に云ふ一カ葉集に云ふ又闌つる意  
あり一カ葉集に云ふ一カ葉集に云ふ一カ葉集に云ふ一カ葉集に云ふ  
源氏に云ふ一色のさしとありぬと云ふとありさしとありさしとあり  
含くさしとあり一説にハ米字の唐音とあり○倭名抄に目翳と訓せ  
る氷より出さる語と云ふさしとありさしとあり外障内障なり○日本  
紀に槭とひもひのさしとあり水と引のさしとあり神代紀に渠槽とあり

樋字ハ古事記にハ申字書にハ木名と云ふ下樋懸樋受樋石樋瓦樋な  
と歌よりあり○刀の血槽とひもひの樋の義とあり全浙兵制に備前刀  
以有血槽為巧刀上或鑿龍或鑿劍或八幡大菩薩春日大明神天照皇太神  
宮皆形着在外為美觀者と云ふ今かゝる者と貴とせり○日本紀に樋とひ  
とよむ李白詩に機中織錦秦川女云々停梭悵然憶遠人と云ふ和名鈔  
にハ樋とよむ新撰字鏡に樋とひもひの響なり○物のかゝ  
るさしとひもひの信濃に田井あり比田井あり上野にカ祿川あり比祿川  
あり如○面と和して心の和せさる人とひとすといふ諺ありこの  
行ハ箴と云ふれはかゝるつ所よりぬと譬へたりなり○神代紀に飯と  
よむの箕と云ふは也○後宮名目ハ經水と火と名けたり對  
屋に出く別火と云ふさしとありさしと起りはさしと別火と云ふぬと火と  
はりといふさしとありさしとあり○傍とよむはさしとありの略畝傍山と云ふ  
○飯とよむはさしとありの略筒飯飯高の類是なり○乾干とよむはさしと  
略なり洞も同○引ハさしとあり乃略なり



△ひあし 晴蛉日記源氏物語の日のあしと見えたり楊用脩の書に諺  
語に日脚射空金楼直とあり

ひあし 俗語也日間のあし之踏危乃意より氷間乃あしや復薄氷乃  
意あり○香具之火のあしといふ火味乃あし

△ひらつ 秀とよみ日出乃あし一説は秀とほしとよみ穂出乃あしと  
あり靈異記にひらつとよみ

ひらつ 氷池乃あし氷室は同一とあり○氷池祭といふ氷乃あし  
年の凶年なほとて祈りあはる延喜式にええあり○生火ともあり  
官人あり

△ひらつ 日本紀に日向とよみ和名抄にひむがもええあり朝日直刺  
夕日日照國なるふしも紀にええあり九々神代ハ皆日向乃國ハ都志  
半ぬり景行天皇も行宮ハ高屋宮といふ○神代紀に筑紫日向小戸橋  
之憶原と見え日向乃名初て出たりとれ此事蹟筑前ありと日  
向ありとあり松下氏貝原氏ハの説にありと見え日向と九國乃

惣名なりとあり今文意減詳に考をた日向乃小戸ハ橋之憶原に對し  
る日向と橋ハ所謂枕詞也日向と日よ向ふ所とあり也一國乃名より  
とくよりひむとよみ一風神祭祝詞に吾宮者朝日乃日向處とあり  
万葉集に八十一隣之宮ハ日向ハと見えあり岳仁紀にも將軍ハ網田と美  
称し多倭日向武日向といふと見えあり此考一通證ハ漏れぬとて  
るに記しぬ○大同類聚方に日向藥高千穂藥ともいふ大伴宿禰家守  
傳之葵弓と見えあり○ひらつはひの文菊なり江戸にひらつ大和  
加賀にひらつあり

ひらつ 日本紀倭名抄に燧とよみ火成擊出と乃具なり靈異記に燧  
とひらつびと訓す新撰字鏡に磬とひらつ石とよみ今諸國に産す  
本字より玉火石なるは伊勢度會郡乃村名に火打石あり○旅立人  
に火打と贈る歌集に多く見えあり日本武尊乃故事に起まり古  
事景行記にあり○燧乃推現と清瀧乃神祠といふ○兼好法師  
伊賀國種生庄園見山は菴と結ひ比淨辨筑紫へまうとありと火







たりの佛祖統紀道遠傳附録に日本國最澄遠來求法泛舸東還指  
山為天台創一刹為傳教と又由日枝乃坂下福成明神乃社あり是  
傳教大師入唐乃時の從者に舟福成といふ者ありしに入唐の時天  
台山拜巡乃踏引乃一紙よる也○新日吉の大佛妙法院乃南より  
應保元年に新熊野と同時に祭るに公事根源よる也○比叡尾山  
の撰津河邊郡杉生柏原二村乃上方あり

△ひを 氷魚と書り新撰字鏡に龜とよみ和名鉸に鮎試訓せり宇  
治谷上たけ乃乎よより延喜式に山城近江國氷魚細代各一處其  
氷魚始九月迄十二月三十日貢之と云えり氷魚字初字記に云えり  
王起賦よも感於候同上氷之魚といふ東俗に云ふもいふも  
○今北湖より出づ者白魚より別種もや○氷原に庖丁譜  
に氷魚よ紅葉と云と云えり

細代本に紅葉と云せりといふ錦河のふを此と云れ  
ひをむし 和名枚と蜻とよみ朝生と云と云えり

川乃河よりおのほはらふむしなるしに氷魚虫と名けし  
や源氏橋姫乃巻よむひをむしと云ふもそと骨を細流に蜻  
蟬也といふ郭璞の詩に借問蜻蟬輩知龜鶴年といふ意なるに  
本州時珍の説もいふ

ひよりけし 古今集伊勢物語なりと云えり真名本に射禮日に填り  
引折乃日乃氣也といふ五月六日右近乃手番此日紅の下袴織物の指  
貫よるしにけしと云と云えり袂て裾の尻と前を後より折て扱むといふ也  
といふ一説にひよりの標に字をすしに負規儀式延喜式に騎射の式  
にいたす時めしに競馬の時必標と埒と二つありて馬場の標埒  
の口てめしに競馬乃日けしと云と云えり一標とひしに音なるに  
ぬしにふし如し埒といふと訓に万葉集に馬埒とまじりてある類なる  
埒と埒といふ其形異なり馬を防て溢るをさむは意の同一よりて  
埒ともいふといふも疑なりといふ標にひしに音なるに○  
為家々乃説に歌道乃大なりといふ天下乃大なりといふに











影さし出んと言壽くたす... 乃歌よ

諸人乃かかひうけの心業... 道よかれへる泳後一

△ひびき 持風... 氷椽... 木のかう... 一云へる也

ひびき 墓目... 是る音也... 目は似... 一車多... 竹根墓目

ひびき

ひびき 續紀... 将成... 鏡よ攜と

ひびき 衾又... 一り山邊... 又戸引手

ひびき 延喜式... 鏡よ紋と條

ひびき 口裏... 後撰集

ひびき 張茶... 御讀







後昔伊昔等乃号あり三月節後世一日め茶芽と摘成例と成世一日と合  
世の昔字也よく名とすといふ近き代の御製と

世れうら茶のつ志のふりての地より後の昔と

又別儀といふ名目の珠光の松花乃清香の茶とつめきしり真壺のまろ持  
過く茶のつ故の蒸と少しよきせしり珠光乃別儀といふなり○  
鳥嵐同穴集の後鳥羽院乃御宇明恵上人茶乃實と宇治と柘尾と植とい  
つ一説は將軍足利義滿公大内氏に命しり宇治と植しめらせしり  
始るといふと丹波國上林郷より居とて移せるといふ○茶湯とい  
ふもの天龍寺乃開山梵窓筑前崇福寺乃開山南浦入宋乃時持来り  
基子と得く其式と定めし僧寺此行儀多しとかやこれ録舎此條  
乃末年より起り高時千又箭乃城と攻しむふ兵士百服茶湯とて遊  
興せしり及佐々木高氏宅中七所設七番茶賭物七百名本非茶七十椀以  
請義詮又与衆六十三人遊為茶會と太平記にえり百服茶の今も  
濃茶也又薄茶あり足利將軍義政公に至り上下盛に飲ひ豊太閤も及

北野の茶會は茶家者流乃集る三百五十餘人といふ後天下は偏しとい  
り○宇治人乃説は茶と採く製する間濃茶と呼く白といひ稀茶と呼  
く昔といふ収蔵乃後の濃茶と呼く袋茶といひ稀茶と呼く詰茶といふ  
とて又脩治の七品と分ち定む曰鷹爪曰柳葉曰淺黄葉曰薄葉曰金葉曰骨  
曰鶯尾也といふ○舶来乃者と唐茶といふ又阿蘭陀茶あり茗の茶乃晚く  
取也櫃の苦茶也といふ一種乃生木江戸種藝家あり葉大と厚と異は此  
葉蘆也といふ○雜纂に対花吸茶試殺風景に入り日光乃はたりのり  
いと茶と代く用るといふ

ひさおひ 古事記に袴といふり倭名枚同一引帯乃茶束帯より水細  
記よ

ひさわか 官府より解由乃意也年貢と納むは百姓乃内の番と  
あつるは解解戸といふ納めり解庫也○神代紀に界といふり  
界繩といふ又冒法といふり給繩といふ○口語といふに交割乃義也  
ひさほろせ 檀紙といふ男女乃志を通りて艶書といふと用わしり



名くといつ西土乃書<sub>一</sub>松皮紙<sub>一</sub>と云え<sub>一</sub>○東海一漚集<sub>一</sub>の繭紙謂之引合と云え<sub>一</sub>繭紙の唐書<sub>一</sub>日本國使者真人興能善書其紙似繭而澤人莫識<sub>一</sub>と云え<sub>一</sub>初字記<sub>一</sub>吳人以繭と云え<sub>一</sub>一説<sub>一</sub>今乃奉書紙也といつ

ひこでこの 江次第<sub>一</sub>遺曳出物馬<sub>一</sub>二匹并送物と云え北山抄大饗乃條よも奉出物<sub>一</sub>馬鷹あり名義知ぬ<sub>一</sub>十訓抄<sub>一</sub>公任卿小野乃龍大臣殿とむ<sub>一</sub>時朗詠上下卷と云え<sub>一</sub>置物乃厨子よかせ<sub>一</sub>けるゆ<sub>一</sub>算引出物<sub>一</sub>と云え<sub>一</sub>○替礼<sub>一</sub>馬<sub>一</sub>つてもいふ部類鈔<sub>一</sub>正和五年新院為花御覺御章圓通寺<sub>一</sub>為御引出物獻<sub>一</sub>鷹眼一万匹と云え東鑑<sub>一</sub>も處々其義云え<sub>一</sub>庭訓往来<sub>一</sub>引手物と云え

△ひく 引牽抽掣<sub>一</sub>たことよあり日往乃養<sub>一</sub>や○瑟琴<sub>一</sub>も鼓又彈と訓せり<sub>一</sub>と云え長くす意<sub>一</sub>よ<sub>一</sub>○綿とひく<sub>一</sub>横綿とよあり○草とひく又とひく<sub>一</sub>ふとも抽<sub>一</sub>字掣<sub>一</sub>字乃意也○裾とひく<sub>一</sub>曳字也漢雜陽傳<sub>一</sub>不

可曳長裾<sub>一</sub>乎と云え<sub>一</sub>○印とひく<sub>一</sub>牽轉乃系磨とらつ<sub>一</sub>○樓字とよあり踰東家牆<sub>一</sub>樓其處<sub>一</sub>予乃類也○新撰字鏡<sub>一</sub>根とひく<sub>一</sub>と云え<sub>一</sub>○衆<sub>一</sub>物と給<sub>一</sub>ともらつ<sub>一</sub>人の心とひく<sub>一</sub>と云え<sub>一</sub>物<sub>一</sub>輕重とひく<sub>一</sub>と云え<sub>一</sub>もらつ<sub>一</sub>關<sub>一</sub>とひく<sub>一</sub>と云え<sub>一</sub>湯とひく<sub>一</sub>と云え<sub>一</sub>辞も落くや物語<sub>一</sub>と云え<sub>一</sub>○算<sub>一</sub>と云え<sub>一</sub>准字と譯<sub>一</sub>せり<sub>一</sub>と云え<sub>一</sub>○引津<sub>一</sub>の筑前<sub>一</sub>あり

ひく 繩<sub>一</sub>と云え<sub>一</sub>銅山<sub>一</sub>ふと用<sub>一</sub>る是也○北<sub>一</sub>丘<sub>一</sub>の律僧とら<sub>一</sub>○耳<sub>一</sub>とみ<sub>一</sub>乃び<sub>一</sub>とら<sub>一</sub>

ひく乃やは乃 俗諺也祇園會<sub>一</sub>山ほ<sub>一</sub>あり山ほ<sub>一</sub>と云え<sub>一</sub>出<sub>一</sub>町<sub>一</sub>は<sub>一</sub>技町<sub>一</sub>あり<sub>一</sub>年貢<sub>一</sub>と云え<sub>一</sub>佳例<sub>一</sub>其日<sub>一</sub>は<sub>一</sub>持<sub>一</sub>參<sub>一</sub>す其時酒<sub>一</sub>と云え<sub>一</sub>甚急<sub>一</sub>か<sub>一</sub>と云え<sub>一</sub>乃<sub>一</sub>山<sub>一</sub>乃<sub>一</sub>と云え<sub>一</sub>○寄<sub>一</sub>抄<sub>一</sub>恋<sub>一</sub>李吟

△ひけ 俗<sub>一</sub>ひ<sub>一</sub>け<sub>一</sub>と云え<sub>一</sub>も<sub>一</sub>ひ<sub>一</sub>け<sub>一</sub>と云え<sub>一</sub>も<sub>一</sub>軍<sub>一</sub>乃<sub>一</sub>驅<sub>一</sub>引<sub>一</sub>より<sub>一</sub>出<sub>一</sub>る<sub>一</sub>詞<sub>一</sub>あり<sub>一</sub>



又比奥乃音轉ありともいふ

ひげ 倭名抄ニ鬚<sup>ヒゲ</sup>かゝつひげ鬚<sup>ヒゲ</sup>鬚<sup>ヒゲ</sup>沈<sup>シム</sup>りつひげとありけり  
とあり全浙兵制ニ三了鬚とひげと譯せり又鬚<sup>ヒゲ</sup>のうひげ鬚<sup>ヒゲ</sup>あり  
ひげ鬚<sup>ヒゲ</sup>の類ひげとあり○鬚<sup>ヒゲ</sup>と剃<sup>ヒゲ</sup>の東照宮乃時より此事といふ  
豊太閤乃像より長須あり加藤清正美鬚乃名あり大猷院公類鬚を  
剃<sup>ヒゲ</sup>今乃風俗とあり○俗諺ニ諂諛<sup>ヒゲ</sup>乃者とおひける塵<sup>ヒゲ</sup>を取<sup>ヒゲ</sup>いふ  
の事文類聚ニ丁晋公魏<sup>ヒゲ</sup>萊<sup>ヒゲ</sup>公<sup>ヒゲ</sup>會<sup>ヒゲ</sup>食<sup>ヒゲ</sup>せ<sup>ヒゲ</sup>の美魏萊公乃鬚と深  
いと丁晋公起<sup>ヒゲ</sup>く排<sup>ヒゲ</sup>ふと見えたり

ひげらかき 人の街とら俗語止てらぬも照<sup>ヒゲ</sup>及<sup>ヒゲ</sup>ふもと見えたりかとも  
あり

△ひこ 彦字とよあり古事記ニ日子と填<sup>ヒコ</sup>り男子乃美称也韻會ニ彦常  
也美也とあり古事記ニ豊玉姫の白其日子言<sup>ヒコ</sup>とあり彦火<sup>ヒコ</sup>出見尊  
かう<sup>ヒコ</sup>夫<sup>ヒコ</sup>とあり如<sup>ヒコ</sup>とあり又比古達<sup>ヒコ</sup>とあり彦父<sup>ヒコ</sup>乃美也今世乃俗ニ其夫と  
かやらとあり如<sup>ヒコ</sup>○日本紀倭名抄ふと孫<sup>ヒコ</sup>沈<sup>ヒコ</sup>りありひこ通<sup>ヒコ</sup>と重<sup>ヒコ</sup>あり

子とら意<sup>ヒコ</sup>や今俗曾孫とあり○喉<sup>ヒコ</sup>ひことらひこ名<sup>ヒコ</sup>乃略<sup>ヒコ</sup>や○衣  
よらふ孫<sup>ヒコ</sup>より出<sup>ヒコ</sup>るや○彦島<sup>ヒコ</sup>も長門<sup>ヒコ</sup>國也

ひこぐえ 倭名抄ニ藥<sup>ヒコ</sup>とよ書<sup>ヒコ</sup>ニ由<sup>ヒコ</sup>藥<sup>ヒコ</sup>とあり孫<sup>ヒコ</sup>生<sup>ヒコ</sup>乃美<sup>ヒコ</sup>あり新撰字  
鏡<sup>ヒコ</sup>ニ稗<sup>ヒコ</sup>とよ美<sup>ヒコ</sup>とひこぐえとあり童蒙<sup>ヒコ</sup>頌<sup>ヒコ</sup>韻<sup>ヒコ</sup>ニ換<sup>ヒコ</sup>と作<sup>ヒコ</sup>る

ひこづらふ 古事記乃歌<sup>ヒコ</sup>より萬葉集<sup>ヒコ</sup>より文選<sup>ヒコ</sup>ニ紛<sup>ヒコ</sup>拏<sup>ヒコ</sup>とありひ  
こづらふとあり今ひこづらふとありひも詞<sup>ヒコ</sup>同<sup>ヒコ</sup>源氏<sup>ヒコ</sup>より志<sup>ヒコ</sup>

らひ又ひこちうひとありも同語<sup>ヒコ</sup>あり

△ひご 膝<sup>ヒゴ</sup>とらり引<sup>ヒゴ</sup>かき<sup>ヒゴ</sup>の義<sup>ヒゴ</sup>あり○物<sup>ヒゴ</sup>よ小<sup>ヒゴ</sup>膝<sup>ヒゴ</sup>とらり事<sup>ヒゴ</sup>入<sup>ヒゴ</sup>えり○  
佛者乃右膝<sup>ヒゴ</sup>着<sup>ヒゴ</sup>地<sup>ヒゴ</sup>の胡<sup>ヒゴ</sup>法<sup>ヒゴ</sup>とらり樂<sup>ヒゴ</sup>記<sup>ヒゴ</sup>ニ卧<sup>ヒゴ</sup>坐<sup>ヒゴ</sup>致<sup>ヒゴ</sup>右<sup>ヒゴ</sup>とあり三代<sup>ヒゴ</sup>も亦<sup>ヒゴ</sup>此  
礼<sup>ヒゴ</sup>ありと濟<sup>ヒゴ</sup>北<sup>ヒゴ</sup>集<sup>ヒゴ</sup>より申<sup>ヒゴ</sup>○倭名抄<sup>ヒゴ</sup>ニ膝<sup>ヒゴ</sup>前<sup>ヒゴ</sup>とひごらかりとあり今  
ひごらとあり○豊州<sup>ヒゴ</sup>とつと薩州<sup>ヒゴ</sup>とつと南部<sup>ヒゴ</sup>とつと  
ざか<sup>ヒゴ</sup>我<sup>ヒゴ</sup>後<sup>ヒゴ</sup>とつと武射<sup>ヒゴ</sup>か<sup>ヒゴ</sup>とつと  
ひごらとあり久<sup>ヒゴ</sup>とありひごらとあり白<sup>ヒゴ</sup>神代<sup>ヒゴ</sup>直指<sup>ヒゴ</sup>抄<sup>ヒゴ</sup>ニ日<sup>ヒゴ</sup>去<sup>ヒゴ</sup>乃<sup>ヒゴ</sup>義<sup>ヒゴ</sup>と











ひじり 日本紀の聖字とよめる万葉集に日知とかけり日徳と知しめ  
 と聖天子乃稱之又大人とよめる西土にも天子と聖とをいふ我邦  
 日知乃意も西土と異なり天の日嗣志なりめと皇孫乃尊と申奉る之  
 ○聖神の古事記舊事記にも和泉國和泉郡聖神社所祭の神是也  
 三代實録に貞觀元年和泉國聖神列於官社為從立位下と云えり信  
 太山より○万葉集に酒乃名とひしりといふしりといふは魏乃徐選の  
 故事に辭客謂清者為聖人濁者為賢人といえり○物語にも云えり  
 とも名遠乃僧とせり今世にて其真似とする者乃通稱と云ふなり  
 ○源氏に俗ひありといふ東坡山谷も自ら首髪乃僧在家乃僧と  
 詩に作る意も高懸ひしりも信西乃末子按察使乃君より起せり  
 といふ名利乃衲子乃稱と云ふもはや  
 ひしり 日本紀に天陰とよめる日乃あけり  
 ひしり 林氏説に物乃ひすといふ也といふ又基乃聖目と訓すかきも  
 心乃徒然叫ぶ事

ひじり 孟子に孔子の聖なる時ある者之を見えり年中行事歌合

秋奠

かゝ人のいふにけいけいといふは時よりあるなり

△ひす 飛龍と書り今漢渡乃物あり

ひす 神代紀に日隅宮あり俗に物乃ひすといふ此をひすといふ或は飛

墨と書り一説に日隅も大己貴神乃ひすとすり乃やと申事と云えり隱

去もかきとすといふ

ひす 倭名鈔に鹿尾菜とよめる天長中に停太宰府貢鹿尾脯とあり

も是なる一漳州府志に羊栖菜也といふ伊勢物語に云ふも

るえり今志に干杉は藻乃義あり一伊勢物語に歌よもと清

濁もかきといふ一是は送るいふなりぬとのふり詞法設り料ふ

き也万葉集に高安王の襲る鮎と娘子は贈る如く角のありといふ

土人へ祀りといふ○古本に綿裳と昏一本に袖とありさる共

に誤りて談字あり一和名鈔座卧部に談毛席以立色絲為之といふ



賦役令よと毛と織るもの貢る事ゆき古の用ぬらり  
ひすまゝ 五節乃下部より類聚雜要に種洗と書り物語にひすまゝ  
ワハヒすまゝやくと乃ふとるえたり哉とめかふと乃類ふれ乾清  
乃翁ふへ一ほ一及ひと女工の賤業ととく名目よよるよや翁た  
すは一もらつり

ひすかしま 監字とよめり日本紀に復とくすかしまとよみ恨といすか  
とよみり皆同系今俗ひととらふ此翁ある一苳菊乃翁とらつとい  
か侍らふといさかしま乃まね如一つけらふ詞也○新撰字鏡に斯  
とひすまゝとよめり

△ひせ 新撰字鏡に嶋とよめり字訓とよ心得か一○琉球よと八重  
十瀬とらふ所あり海中の破礁南北五里よわとらふ

ひぜん 肥前乃國の倭名抄よひ乃とらけくちとよめり今音とゆとら  
ととい火國の松島あり肥後のひのちこれとらとよめり○疥とひぜんと  
らふも肥癩とらふ一又南蠻の邪法肥前嶋原よ起りく其宗人よ依托

一征夫よ依托一と世よ周く流布せりよと肥前瘡と呼らつ是と  
亦疫瘍なり

△ひそ 倭名鈔造作具よ檜楚とらえたり細木と名く延喜式よ以檜竿  
為天井とらゆととらえ

ひそろ 日本紀に陰字とよめり日底乃翁とら一隱密乃意とひそや  
うとらつり潜字も同一私字竊字は多く謙辭よ用わたり靈異  
記よ諱又偷とよと異嘿とひそらつりてとら也○新撰字鏡よ  
睽とひそらつり

ひそむ 聾字とよめりひそらつり轉せらる一眉ふとらつり年先て  
口のそげむとらつり嘔字也○聲とひそむと悄聲と見ゆ

ひそく 源氏よひそくやとらとら一此物とらとら秘色也青磁の器  
物とらとら李部王記云天曆五年六月九日御膳沈香折敷四枚瓶用秘色  
宋葉實々筆衡よ近世不貴金玉而貴銅瓷遂有秘色瓷器乃錢氏有國日  
越州燒進臣庶不得用故云秘色とらとら○衣の色とらつり瑠璃色



△ひく 日本紀の常字頃字ナリ訓セリ日五の義ナリ又直字と  
 もよあり○俗語乃ひくくくも頃の義ヤつりくも同く又  
 ひくくのももひく○歌よ山田乃ひくくナリくも引板乃義ナリくも  
 らう新勅撰集の秋田くひくく乃のほりくくえくひくく心得くく一  
 乗集の客乃廬とええく地たひくく遠く處乃田とひくく○楮麻と怖す  
 流落る水只板とひくく、水とせまかくきく動揺ちく鳴くく甚く響  
 く高く西土の水牌くく以板激水以鼓之田間防禽獸之器也一宛委餘  
 篇よええくく○姓よ日田ひくく東鑑よくも

ひく 衣裳乃摺疊と襷積とくは是くはひくく乃略よ和名欽よひくくめく  
 訓セリめく縫めくくくくくく新撰字鏡よ鼓も訓セリ又絹とよめくひ  
 くくくくく○飛彈乃國乃名も國体乃衣乃ひくくよ似くくく山深く澗峻く  
 く釣折籠渡ふく乃名あり後漢書よ跋涉懸度とくく如く師古註よ懸  
 度ハ懸繩而度也とくく○姓氏録よ城田くくくくもええく

ひく 鶴林玉露の錢薄悪者曰慳錢とくくくく鏹の造り字の城文も訓  
 也ひくくくくの階書よ除其内郭とくく意あり一應永十八年八月乃大風  
 相州三崎の唐船漂着せり船中数万貫乃永樂錢ありて南東是と通  
 用するも他錢も同く將軍義持公乃時也其後北條氏康關八州を従一  
 比永樂錢乃くくを用わくくく異朝代々乃古錢と悪錢とくく悪錢ハ皆上方  
 に至りけはより鏹と京錢と名く最初くく永樂一錢よ鏹四錢と充用  
 慶長十一年よりハ永樂と禁止せりくくくく○修驗家よりハ桔字と  
 よあり

ひく 日本紀の頃五とよあり字詩經よくく  
 ひく 九とく南面すくく東よくくく日垂とくくく日乃天よ象  
 を出く意へ○九(右)とくくく秩父よくくくト奥州よ鑿方榘方  
 しん

ひく 神代紀の養字とよあり古事記よ日足と書り赤子と養育一成人  
 とくくく神代紀よ子養又長養とくくく日足とくくく成仁乃







あゝあゝそれこそいふやうにさういふ

任吉の岸といひかゝるものなるにやうに

山槐記明月記よええいふ獵乃服と云ふ此より新く名もや  
保元物語に錦乃直岳と云えいふ鎧直岳といふ即戦袍也東八柄  
兼薄衣乃板乃物といふ長ハ頼義記に三尺五寸袖乃廣さ一尺六寸と云  
少鎧直岳ハ公家もいふ親長記よええいふ又步直岳あり小  
袴乃みんと云錦乃直岳ハ大将乃服之將補す時賜と云大将赤  
地副將を紫地也といふ○堂上方武家乃侍従已上ハ絹精好乃直岳  
とて黒紅色也但紫萌葱紅等ハ將軍御代々着用ははと云  
吹明家ハ精好の紅と着用あり素襖袴とのかりハ胸紐折組と華緒  
との違也○下ハ房乃ちと長絹たといふ色上下同昔ハまつ大只  
着次ハ帷といふと重ね着其上ハ直岳乃下と着  
と伊勢下總入道乃書よ申といふ○布直岳も諸大夫着と  
俗ハ大紋といふ是也

ひびく 換囊抄ハ雷同と訓せり太平記ハ混と云ふ或ハ滔と云ふ  
源氏ハひびきたると云ふといふ小家乃ハ乃かはびすといふ口と  
たるといふと云或ハ低と云ふ叩と云ふ

ひびく 凡そ匠人ハ飛彈乃國より貢せり事國史よええいふ拾遺集  
と云ふかゝる思ひひびくといふをみあひのたといふ

○俗ハ名匠の事といふ又唐よりいふ獄入く木鳥と彫刻一其中  
ハ身と隱一空と云く帰朝セといふと云唐穆宗乃朝ハ飛龍士  
韓志和といふ者あり本倭國乃人として彫刻ハ妙術と得といふ年  
と踏すといふ所在と失ひといふ委ハ太平廣記よええいふ○後藤  
祐兼ハ濃州の武人普廣院の將軍ニ仕故あり獄舎ハ閑寂  
乃間桃核と得といふ其面ハ小刀と云く山王廿二社及ハ猿六十六と彫刺  
す其精密奇勢視者妙と歎といふ罪と免さ其桃核ハ常州ニ祠  
と立日吉乃神崇といふ



ひらりまへ 元前の衣服用に就ては所謂衣冠也續日本紀今右襟といふ本  
又えとて我邦の古も知ぬ一今も蝦夷に俗に衣冠也○俗に事の  
自由ありき。喻へらふも習ひに背くは成らざるなり

ひたひた 万葉集に額髪結ユル在しええら古事記に小碓命の事其御  
髪結額也と見え日本紀二年十五六間東髪於額と見え又新六帖に振つた  
るひの髪もひらり額髪にぬがひとも訓とてや倭名鏡と見えら

○源氏に尼の事と見えひらりと書ひ昔にたを尼とて喝食カウシキかとの  
柄に肩までかると見えらるなり也

ひたひため 定額といふ也續日本紀に額字と見えらるなり小学陳注に  
額猶數也といふ定額に寺家寺田といふ具て格式ある寺と定額寺といふ  
類也徒然州に諸寺の僧のいふもあはる定額の女孺といふ事延喜式に  
いふとて數と見えらるなり公人乃通号と見えらるなり

ひたひた乃くは 六月後詞と見え申大和の國の四方に真秀マホと見えらるなり譬へらるなり  
今と日の中空のひ日高といふ也○日本紀に日高見國と見えらるなり都と

いふ也式に陸奥國桃生郡日高見神社又の鄙に都ありといふ意也古事記に  
天子の事は天津日高と見えを併看す○紀伊國日高郡と四方のひ高と  
遠く故と私記にらるなり

△ひら 神代紀に塗字と訓ずる水土の義ありと見えらるなりひらひらぬま也土字にひらり  
土形の類是也すは袖ひらげて源氏と見えらるなりひらひらてくは万葉集に所濕は  
よめりひらと見えらるなり又ち也よる漬字と見えらるなり伊勢物語に浅くす  
袖と漬らぬと見えらるなり万葉集に澤田川袖衝をり浅くと見えらるなり又ち拾遺集詞  
書に松の海よひらりあると見えらるなり海よひらひらひら松と見えらるなり又ち  
也○万葉集にひづらと約めてひらひらと見えらるなり○新撰字鏡倭名抄に肱  
肘臂とよめり川かの義ありといふなり又ちひらひらと見えらるなり通と肘の臂節  
也又祝詞に手肱テウデと見えらるなり

ひらひらと 和名鏡に釧とよめり臂纏也涅盤經に在臂上者名之為釧と見え  
ひらひらと 和名鏡に泥とよめり土粉の義あり助諸人一説にひらひらと見えらるなり  
ひらひらと通へ











碑より慎む一〇人きらさ心も去る乃歌らさる否也萬葉集より  
とらふて不不知も書りよく此歌よの上よらと置く下よらと  
うけらるる乃さくは乃たて通つる九く此人乃心うらや土佐日記  
と渚乃院よて

君さひく世どかく宿乃梅乃れ昔乃香ても猶もほひりれ

定家卿云貫之歌心くくけ及難一詞はよく姿おもさるさまは  
好く餘情妖艶の体派このまんと此真乃風体よて意もてよ派で  
もかろれよるまかろる内よこく雅あ巧派あかれく風調とくさる  
物也古今集よ入る歌よ心派はけく吟味とく

ひとら 一とらふ日與つ乃天天地乃間日より尊とあはれ又人さ通つ  
神代紀よも天地之中生二物状如葦牙とらる人乃始之口訣よ一者林曰  
日於天地二也大載禮よ天一地二人三々而九八十一主日ツ数十故人十月而  
生とらる〇尾州知多郡よひとらぬとらふとやうひとらふとふとひと  
五と誤る下野もひとらふとらるころよら所ある〇古今集一本の存よ

ひとら 一人をらふも神代紀よ一身又孤獨をもよらひとらる乃略とらる

みたら乃例とよく又ひとらるもよらる言事記よ二口とやうとよく文述よ  
顔とよら注よ獨也とる也又文よ獨自と連用する者多一〇器よらや  
和名鈔よ薰爐と訓ヤウ火採乃外ハ木内ハ銅又陶よて上よ銅乃籠と  
れほふ物之類聚雜要よ火取籠火取母乃圖及小火取乃圖あり香乃火とらハ  
桐乃葉乃ら繪あて乃文字く

桐の原とふく方くく成より必人と侍とれりれや

とらふ故也と或記よええら

ひとら 日本紀よ間をよらる萬葉集よ人間とええら歌よよめら多  
く人間乃人乃見ぬ間〇一間乃兼もあり

ひとら 日本紀和名抄ホと圖固とよらる人屋乃茶也抄よ囚獄司ひとら  
くさくさよら拾遺集よ人乃め侍ふ男乃あてや侍らる  
志のひつるあてとて唐衣ひとやえんとい思はれ



ひとがま 備とよめる人形之偶人も同一土偶人木偶人あり日本紀は葛靈  
とくまひとがまといふものあり○夜具より人形あり侍中群要は画一刺内藏寮供  
御人形事とる白源氏のみかき川近き心ちする人がこころを思ひやりと  
る白源氏日本紀の身代之者也といふ式は金人形又金銀塗人像といふ  
くまの祝詞式乃東文忌寸部献横刀時呪文は銀人といふ是也金人銀  
刀といひぬる文乃略之又鉄人形あり又茅がや草乃人形たといふ類聚雜要  
かといふ胡人形又の○音くま人形といひ玩具小像乃然稱之土人形ハ泥塑  
人也塑ハかまといふ

ひとたま 人魄之本草より白人益死則魄入於地隨即掘之状如鉄炭  
もらる明月記は正治二年三月五日夜前北壺吳竹辺有入魂毛去といふ  
毛時より地より三四丈と過す落くといふ玉乃如く地下黄泉よ入といふ  
或ハ落る所は黒色乃小虫多しといふ

ひとしほ 一人再入之紅く朗詠集よりえより色よりふ詞く猶一段といふ

ひととら 俗語く西土は環拱又連抱又一圍ふといふひとたらの略く

ひとくま 神代紀より人民又民一字とよめるくまの種乃養なるア古事記より  
人草といふ

ひとがま 日本紀より人別とよめる今音とよめる字魏志よりとら○  
人言乃養なり又人の口といふ夫木集

ひととら 世の中ハ形根と何なる人の口や行まといふ

ひととら 和名鈔より一屯とよめる綿乃量之今義解より綿二竹曰屯といふ  
拾芥抄より十二兩為屯といふ通鑑注より綿六兩為屯といふ

ひとがま 伊勢神宮より遷坐乃時より人垣あり倭式帳より○殉死乃人垣の  
名ハ古事記よりえより字乃まよりて生死葬祭乃異あり

ひとがま 人心人情といふものあり人心惟危といふと歌より心といふたのま  
とよめる文集大行踏より巫峡水能覆舟若比入心是安流といふより行踏難

唯在人情反覆間といふ諺より河中より立といふ人申より立といふ意是く















ひのえ 丙也火の兄乃義續日本紀賊盜律なりと丙と景と作る西土の書  
もええと

ひのゑ 日祈儀あり儀式帳に日祈内人為惡風不吹祈申告が申進くとええと風  
官と風日祈宮ともいふ風日祈の神事あり

ひのゑと 日本とよめう万葉集にもええとをいふ誤りやうに詞もええと  
とらう源氏にもええ新古今集に成尋法師入唐侍りりる母乃讀侍りる  
とゆと天の下とありとて照日の本はあはれとて

ひのくま 肥前肥後から景行紀に到火國日没夜冥不知着津道見火光非  
人火故名其國曰火國といふ○大同聚類方に火國藥肥華北郡姫島直等家方而を  
恭御宇養之元是少彦名神廟也といふ

ひのみこ 万葉集に日之皇子と書り日神の御裔なりとてかへり奉りる年中行事  
歌合行幸の題に日乃り君ともいふ○日乃御孫日乃官日乃御門意皆同一

ひのたて 万葉集に日経といふ日本紀に日経といふと東西といふ  
ひのおき 万葉集に日緯といふ日本紀に日横といふと南北といふ

ひのおほし 畫御座と書りごごと音もいふ清凉殿といふ平敷御座に  
○別殿行幸の畫御座の御劔と持せらる也とのみ徒然まも出る  
○百練抄に崇徳院の時畫御座劔失といふ又白骨のりといふも  
ひのみつゝ 古語拾遺に日御綱といふ注に今斯利久迷繩日影之像也  
といふ今熱田乃神輿石清水乃神幸に此物あり

ひのいろくま 万葉集に日入國ふ所遺といふ唐國と持り經籍後傳記に  
日没處といふ

ひのりつゝや 神代紀に日之少官といふと  
△ひご 檜葉乃義扁栢といふ朝鮮にあり唐にあり今津輕南郡より  
出の檜も多しといふ又らやばひといふ尾にありまのふいむらう

○出雲國の伯伎國の界比波乃山古事記にその枕草紙にもひの山といふ

えと

えと

えと

えと

えと







くろり○上巳の雛提へて贖物の義也といふ源氏の君須磨に充遷り時三月巳の日陰陽師を召て被へさせぬくくく人形と舟に載り流し彼物語より一説は柔神祭の義ありといふ

△ひふ 盛衰記よりひふの上手と見えたり二の義とてはの幸くといふ○服よりひふあり被風と書りひいんといふ唐音之此物躰と黒く縁と白くあつて瓜鶴髻といふ也

△ひふ 倭名鏡より雨水俗よりひふと見えたり源氏物語よりいふ地のそとそわむむかりれひぬるといふ俗より音りて氷と見えたり是也長和二年三月雷鳴氷降大如梅とも見えたり○日振鳴の伊豫也純友が据る嶋也

△ひぼこ 神代紀より日矛と見え鏡といふ説は舊事記より百名に据る鏡とも見ゆ

△ひま 和名抄に隙とよめり日間の義より問もよめり○四声字苑に隙壁際孔也といふ又卻とよめり○源氏よりひまある御中といふ中乃

とらふ 西土の詞も同一に祓やのひまをいふをなかりたり閨門の隙のあはむ

△ひま 日待の室所殿日記より十月十五日今夜御日待例年也といふ上世にかへ中世に來密家道士の習合にてわふ事あり大かく一條院の御後佛事の盛んあり

△ひま 日本紀に隙駒といふ礼記に若駒之過隙然と見えたり

△ひま 源氏より氷水乃義和名鏡に膳夫経を引て氷漿を今按以氷入漿也といふの成り思乃俣の日記より氷水といふふとよめりて○俗より乾水乃義

△ひま 日本紀に秋に復虫乃火虫乃衣といふ燈蛾といふ火採虫といふり○俗より豆の葉をいふ甲虫といふ又和泉よりいふ葛上亭長也

△ひま 氷室と書り事乃起り仁徳紀より出たり氷室の周禮よりいふ山陰



乃日のゆゑに所定をほりわくひ乃かどろと云はるるに水とせき  
く冬乃厚氷と収め置く六月一日ほり出く献ぐと云う○朝野群載に差  
進氷事記せし神分料秋奠料關白殿下御料より官史生食所料より  
又えく西土に伐氷之家より其條に氷長もるえと云う○山城葛野  
郡に五處あり○東鑑に炎暑之節者召寄富士山之雪所為備珍物也と云え  
る○ひむろくはる木の柏の類を志やしと稱するも同類なり○葦と氷室  
まゝくふ藏玉集より云えり○氷室乃社に南都にあり祠後氷室乃址あ  
り後成郷

春日野乃古く氷室乃わくそそ岩乃けし猶と冷しと

ひんづ 俗語に下水乃茶をひんづと云ふもひんづは技ふと云ふ

ひんづ 式法にわく大抵ふと云ふは同一鬢除はトよらふ腋つめの事也鬢かこま  
二歳ふと云ふは五歳鬢と云ふ十六歳ふと云ふは二十歳鬢と云ふ女子は鬢を  
ひ男子は衣服のひと云ふと云ふは集ふ年のことせはるる鬢のことと云ふ  
むかひ八歳の比よりと云ふ始よりと云ふと云ふ

△ひめ 姫字媛字はより日女の女子は美称也師古に説く姫は周姓其女

貴千衆國之女所以婦人美稱皆稱姫と云う○倭名抄に糰糰と云ふは非米の  
音ありと云うつは物語に云ふトふと云ふはひめと云ふは水飯也  
と云うは松多紙と云ふはひめのぬきと云ふは書り今俗ひめのと云うは三寶堂類  
抄に糰糰とのりと云ふ是也○同書に鶴と訓せし伊豫風土記に鶴と云ふ

○侍中群要に昏下供御院稱御比米と云

ひめ 源氏物語にひめ秘する名也と云う

ひめ 日本紀に命婦と云ふは延喜式に宮人と云ふは姫乃稱也乃稱に六位と云

ひめがき 神代紀に堞と云ふは姫堞の義也城上女堞也と注せし神堞と云ふは如

ひめがき 和名抄に糰糰ひめと訓し注に非米非糰之義也と云ふ集韻に糰糰  
米也類篇に煮米為糰廣韻に煮米多水也と云ふひめの下に云ふは饌差類  
考曰糰糰は即平生所食の飯の類也古くは飯と稱するもの今の強飯是  
也又曆家よひめと云ふはあり是は免公供しと云ふ也然し  
異説と云ふ者あり用益かといふ



ひまらちさき 日本紀の内命婦とよめり ○枕草紙は行事のさうれひあ  
まうち君とてんえさるの公事根源よりひまらち也東堅の内侍司の被<sup>臣</sup>臣  
正月の女<sup>叙</sup>叙位は叙爵とふふとりく<sup>姫</sup>姫大夫とてふやとらり

△ひも 日本紀は帯倭名抄新撰字鏡に紐とよめり引結ぶ物ふれらふや俗に  
ひちもといふ結紐長紐に日本紀よりえさるの長紐と延喜式は尚紐ともえゆ  
○通鑑晋紀注に今人謂條頭采為流蘇とてゆ條の物のひも也流蘇はひもの  
先のふさ也

ひとの 栢捲といふ檜物の名徒然州にひとの木とてえ盛衰記にひもの舟  
とて栢の末つとる舟とてえさるの舟とてえさるの舟とてえさるの舟とてえ  
故合よるえさる新撰六帖よ

近江あるひもは里のひも栢花とて折人りぬ  
曲物とてさるは栢皮は用とてさるは栢皮とてさるは栢皮とてさるは栢皮と  
即遺<sup>遺</sup>遺野とてさるは遺<sup>遺</sup>遺といふとてさるは遺<sup>遺</sup>遺といふとてさるは遺<sup>遺</sup>遺といふと  
とてさるは遺<sup>遺</sup>遺といふとてさるは遺<sup>遺</sup>遺といふとてさるは遺<sup>遺</sup>遺といふと

ひもろく 神代紀に神籬とよめり倭名抄にひかろくとてえ叢祠といふとい  
つる是神社の濫觸とて一万余集よ

神のひもろくはとてさるはとてさるはとてさるはとてさるはとてさるはと  
○東鑑は將軍家被始行御神籬被陰陽少名親職奉社之とてえ後世此事とて  
かと○岳仁紀に熊神籬らり天日槍とてさるは七物の内也是ハ珍の熊踏とて  
よや或は皮楯の表とて○神供といふも同意也清輔家集よ

ひもろくはとてさるはとてさるはとてさるはとてさるはとてさるはと  
献<sup>ヒモ</sup>昨の釋奠の次乃日祭祀の供物と大学寮より内へさるはとてさるはと  
もろくとてさるはとてさるはとてさるはとてさるはとてさるはと  
まはらとてさるはとてさるはとてさるはとてさるはとてさるはと

○但馬の山麓田中よ小一の森にさるは誰とてさるはとてさるはとてさるはと  
ひもろくはとてさるはとてさるはとてさるはとてさるはとてさるはと  
ひもろくはとてさるはとてさるはとてさるはとてさるはとてさるはと



うしろふと見えたりかゝる貫之のすまじゆ

ひもかゞし 万葉集に紐鏡と云ゆ紐刀の類也のこたれ山つづけに鏡の裏に紐  
に常は着て解ゆの莫解との云也ふとのとをうららるる○氷面鏡の義もらる  
藻塩まは鈴麻の漉とひもかゞしことなるは十瀬の波とらる

影清に岩間の水たふもかゞしとけてもまよひよりあか

△ひや 日本紀及宋史に火箭と見えたり古弓りて射とらる後世にふとのとら  
火器也とらる○石火箭大國火箭棒火箭炮火箭大筒鉄砲ふとのふらり全  
浙兵制に手銃とひや鳥銃とたんとひや砲とらる譯せり○俗に化城とも  
らる

ひやと 令冷の義也○刀りて人と斬とらるも義同し轟字とよむに説文に轟  
而切之為膾と見えたり

ひやうじ 火危の急語也源順夜行翁の狂歌に夜々警火舊府中呼曰火危彼誰  
何と見えたり火用心の義とらる

ひやふー 拍子とらる和名抄に百師の音にひやふと也神樂に拍子末拍子とらる

手拍子 笏拍子扇拍子とらる切韻に拍子打也と見え延喜式に擊百子と見え  
えあゆみ拍子のひやと拍子の事也と体源抄に見えたり又半拍子とらる事たり  
又間拍子○鞠とける足ぶと三拍子たり今俗に三拍子とらるは是感也  
○關東に馬上して響けつとらるつとらるの音とらるは響ませるまゝひやふと  
とらる本とあてゝまゝとらる

ひやうとん 江次第に平文倚子平文高机たり是は白木机に胡粉とて盛るとの也  
とらる延喜式に蔀繪案平文案と並に置上とらるぬ地面の平らなる事たり  
とらるよも記録に平文持衣と見えたり禪問の按に平文謂以白鴈彫唐花也  
とらる

△ひゆ 冷とらる氷雪の義倭名抄に冷酢とひらもゆきるとらる○轟字も  
同し今にひらふ詞也とらる○倭名抄に菓とらる性冷の義と東國にひ  
やう津輕にひやうあど加賀にひやうとらる赤菓とあひゆとらる漆色餅  
と入る馬齒莧とらるひゆとらる相摸とらるぬひやうとらる今にひらふとらる  
ひや也加賀にひらひやうとらる白菓の唐もひや也五色菓にひゆ也又まゝひ



ゆくらふ常のむゆや

△ひよ 鹿の音よらるる末集

萩公つらふり所よりのまなむれふかぐひすくつゆもくす

ひよま 雞の雛よらるる是もほろどりてしふ成り一松子紙よ雞のひふのひよく

かしまくくつてとるえ神宮ひよくの祭も意同

ひよる 霽とらふ日依の義日方とらふ如く○諺よ天一太郎とらふ天一上の朔

日八事次郎よ八事の二日め土用三即ハ土用の三日め寒四即ハ寒よ入四日め也ハ日雨

ふり出でハ天氣ちよらる

ひよる 十二支成らふ日讀の義也月神と月讀尊とまうとる也物と教うる事

とよむとらふ漢も同く○九と十二支の名ハ十二肖はりてまうる春風堂隨筆

よ今人以十二生肖配十二辰為人命所屬莫知所起とる

ひよふ 身底記よひよんぬ事とらふ瓢の轉る詞成へ一尾張よ直よ瓢

とひよんくしふ或ハ凶の詭言也とらる

ひよる 平家物語よ狂紋とあり大双帯よ素襖よらる今家紋の加ハ紋

とひよる 物見よあるあまの車次とらふは紋はてせるとらる○家紋の起る

らつの時ふら成り及晴陰日記よ菊れ紋ととる今事又えとれと今の定紋と

の義よ非ず中世武門盛あり一より幕の紋よ家と分てハ是より始りて家々の

定紋とたりと成り又秘文あり又通文とらふ事死よてハ唐花系よてハ香葉

ふら成らふむ紋た紋とらり誰と看してと苦くむねとらりとらるハ

西土の花号よあくとらる其幕の紋ハ推古紀ハ旗ハ繪くこととらるハ瀛鵬とら

つと又宗五記とらる書よ公方様御服とらハ織物よて色御紋不定白と綾又ハ

綾はむぎを地成色と深く御紋紫ふくとけらと云は是ハ東山義政公時代の

事ハ御紋不定ある成りれハ其比ハ衣服ハ家紋ハ膠と何の紋とてとらる

也とらる

△ひら 平とよあり開く義也○紋とよむも糸とよむも義同く一落くハ物語よ

一ひらとよむ枚ハかどとらる糸茶ハ紙ふとらる又張とよむハ皮一張の類也○

名ハ成とよむハ朝成ハハ体源抄よ足少衛とよむハ平重衡とらる○平門ハ扉

也とらる







良の田村に坐して皇太子を立給りて其田村より今木大神宮崇め  
 ともち也太政官式に平野祭桓武天皇後王及大江氏和氏并預見參延曆八  
 年紀に皇太后姓和氏贈正一位繼之女也母贈後一位大枝朝臣之妹后先  
 出自百濟武寧王之子純陀太子之少和氏の姓氏録諸の中より此より同  
 一○久度に神名式に平群郡に知く今と久度村あり古關の事不詳處も  
 同祝詞にも久度古關に一章に以廿二社次第に据の五座也さう久度古關の  
 一所に祭るるるる台記に平野社司奏詣以縣神預官祀不許する○内  
 膳司よかま三ツあり一バハの一派忌火一は庭火金とる○元弘の皇軍赤坂  
 城の守將に平野將監とる

ひや 常の屋作りとらる盛衰記に平家と訓する是也

ひだ 新撰字鏡に艘とよみ倭名抄に船とよみ俗に用平田舟とらる平松  
 ○殊の一種の壁錢ともあり平たき物也とらるるも○ひだも此釜  
 に松永久考に環器也信貴城にて信長公のため攻られし時碎る棄るる  
 と或平雲とらる○平田城に伊賀山田郡也平田入道平家継に据る所せし

三日月氏に弟家長も伊賀平内左衛門是也

ひび 日本紀に裙とらるるひびあひもるえさう平帯にたつらるる倭名抄に  
 うみくともあり衣服令集解に故帯と又少男の袴の上は褶成さうる故に俗に  
 くらまはひびとらる

ひよ 俗に物と強詞とらる東鑑に成平所望十訓抄にひよかへ今昔物語  
 にひよとゆゑてたへ盛衰記に平よとと真平にもるえ太平記に平よ憑むと  
 らるひよの平懐の意も又省免ととるもらるる平等の義あり

ひやく 源氏に神ありあくとみ少日本紀に其雷融ととのかくひかりひらめよ  
 とよあり或の閃とよあり著聞集に講してひやくかんと時とらるる聴衆の立ちあはる  
 ふれい西土に懸閃ふらるる如く念音閃註に群魚驚散良くらる水中忽有忽無  
 のさまねき魚の網ふらるる恐とらるるひやくの念字と閃に閃中よ人ゆつて或の  
 又えええええ意也

ひらまき 三代實錄に充壹此島曹并平纏各二百具とみゆ甲の敷あり







ハ敷字也播字も意同 ○鼻とひるハ噴嚏也トひるハ放屁也ト云ふハ  
落クハ物語ト云々 禪録ト何衆ト云々 虫の子ト云々  
○午枕ハひるハのヤウ也

ひるむ 蛭身の糸也蛭ハ糸ト云々 蛭ハヒルト云々 蛭ハヒルト云々  
ト云々 ○倭名抄ト瘰癧ト云々 瘰癧ハヒルト云々

ひるむハ 東鑑ト將軍家御蚊觸之間可有蛭啗之由施茶院使忠茂朝臣申行  
之ト云々 啗字詳ハ古き治療の術ト云々 今もト云々 朝野群  
載ト勘申御蛭食吉日ト云々 又云々 四月廿四日權醫博士和氣相秀ト云々  
同事ト云々

ひるがごと 翻ト云々 日中ト云々 物の盛んト云々 必ト云々 意ハ

△ひる 日本紀ト領巾又肩巾ト云々 振手の約ト云々 名也延喜式ト帔ト云々  
婦人項の飾の服也 ○祝詞ト比礼桂伴男ト云々 女の御膳等ト云々 仕ト云々

ハ云々 男の結の借字也比礼ト袖を云々 儀式帳ト云々 絶比礼四具ト云々  
云々 大神宮式ト縮比礼八條ト云々 ○万葉集ト暗領巾ト云々 去ト云々  
ト云々 縫殿式中宮の條ト領巾四條料紗二尺二寸條別九尺ト云々  
の領巾成ト日本紀ト刺領巾アウ人の名也 ○万葉集ト天領巾ト云々  
ト云々 婦人の飾ト云々 妻を悼ト云々 秋ふれハ人の死ト云々 天ト云々  
天ト云々 又袴領巾のかけまハト云々 妹ト云々 名ト云々 ○ま  
ト云々 鏡のひるハト云々 青きト云々 ぬハト云々 符の鬘尾のやト云々  
ト云々 類聚雜要ト鏡臺羅網二枚ト是也 ○牙のひるハ延喜式江次身  
ト云々 内宮御神衣ト比礼あり ○花ト云々  
苞也 ○簪をト云々 同ト云々 大双紙ト云々 又ト云々  
ト云々 此ト云々 上ト云々 九石のひるハト云々 又ト云々  
ト云々 鯨ト云々 鯨ト云々 鯨ト云々 鯨ト云々 鯨ト云々  
ト云々 据ト云々 鯨ト云々 鯨ト云々 鯨ト云々 鯨ト云々  
ト云々 舊事記ト蛇のひるハ蜂のひるハ古事記ト蜈蚣のひるハト云々



ひろふくらふ皆其物所採ふて振物の名也又古事記に振波比礼切浪比礼  
ふくると同しとて衣服の事なる一〇ひろふる嶺は万葉集にも肥前國  
松浦郡あり又新後拾遺にもゆるの石見國美濃郡にゆる高角山とよみ  
合まらり日本紀に大葉子ひろふるを教よとて万葉集にも佐用姫  
の事よらり古外國とて終る一〇の領巾は振る其魂は招き一故實は  
る一よや鎮魂祭の意よ近一

△ひろ 神代紀に尋とより開くを如く一太戴禮に舒肱知尋とてえ住  
生論注に里舎間人不竹間徒横長短両手臂為尋とてえと今もあまとの  
て物とてなるはひろふるといふ楊子方言に自関以西凡物長謂之尋といふ  
〇名よ原巨識とひろふる〇とより〇万葉集に舟の事にはゆるせんひろとよめ  
るも尋の義よや

ひろ 廣とらふ尋とる意也弘も同しまみむめ又かたくけりて用らけり〇  
新撰字鏡に衍とひろふるといふ〇廣の廣と同一  
ひろふ 古事記に撥とよみ新撰字鏡に拈とよみ常と拾とよみ又撥とよみ

廣くこれの意也算家よひろひとんとらふ保法也〇万葉集よひろひとらひ  
てゆるふこととゆるひろふの古言ふと一〇今俗女とひろふとらふ禮記に拾級聚足  
ととも

ひろめ 倭名鈔よ昆布とより今音と呼て一名えびとめとよめるは蝦夷島より出  
たりて也水戸の海に昆布は義公より始ふ〇俗に祝賀の物とらふ廣めの  
名よよみとの一と名同一音よよりてよらるるの義とらふ後の事也とらう

ひろがこ 神代紀に廣牙とて古事記のひろきれ梓也ともらう  
ひろがと 日本紀に飄とよみひろがととて意通つ新撰字鏡に八咫とひろがとよ

△ひろ 枕子紙よんえ山家集よよらり鴉字に篇海に昆鳥也とみゆひろく一とらふ  
弱と意ふれ二合の意よとも也〇ひろかまひろくもひろ小也一とひろも小也頭上  
真紅也ぬひろと至小也たてひろ所青黄也かひろと大也とらう〇漆色よひ  
と茶色の醬色もひろく

ひろが 源氏よるも匹弼の意よらる或は婿人とひろがひろくともらう



△ひね

△ひな

△ひおき

日本紀に日置部あり諸國に日置と云ふ所おほく延喜式に凡出雲國置内  
外日置田二町と云ひ出雲風土記に日置郷云々日置伴部等所遺來宿傳而為政之所  
故云日置郷と云ふ

ひおかり

俗に曾祖父と云ふ又ひぢいとも云ふ○ひぢい曾祖母也曾といふは  
ひ重なる意也

ひをど

鎧といふ火威と書り又緋甲の字北齊書に云えりあけの革と云威せる  
音今鏡に云えり源仲綱宇治川の軍に云る歌

いせ武者の皆ひをどこれ鎧とてうち綱代よかてけり哉

氷魚の寄りり伊勢の武者のひをどをいふは日神鎮坐の地なるゆゑ成て  
氷魚よ紅葉と鋪らふ故實と信るなり盛衰記に初の五と云ふちんた  
と云えり文と云ふ伊勢國の住人古市の白子黨と云り古市ハ渡會郡にあり白  
子の菴藝郡にあり古市の伊藤五伊藤六平治物語に云えり平家物語の日野の

十郎と三重郡の日野村あり伊勢平氏と云ふ平家物語に云え伊勢國三日平  
氏と云ふ平家の東鑑に云えり

倭訓栞前編二十五終



一

二

[Faint, illegible text within a rectangular border]





